

「ありがとう岡山」

都道府県対抗 第25回全日本女子柔道大会

昭和60(1985)年から岡山で開催されてきた女子柔道団体優勝大会が今年度25回目をもって終了しました。女子柔道団体戦としては、全国規模での初開催として数多くの選手が参加しました。また、たくさんの選手がこの大会を経験して成長し、女子柔道の発展に大きな役割を果たしてくれました。そこで、これまで大会に役員・監督・審判・コーチ・選手・サポーターとして参加したことのある有志の皆様から、感謝の気持ちを頂戴し、柔道ルネッサンス女性プロジェクト部会の田辺陽子委員が中心となって関係者142のメッセージを岡山大会の事務局に届けました。

教育普及委員会 濱田初幸氏

本大会が女子柔道に貢献した要因の一つに、早くから全国ネットでテレビ中継した功績があげられよう。テレビで放映され女子選手の試合が露出する。この手法が女子柔道選手の士気を高め、大衆の関心呼び、数々のヒロインや本大会の価値向上、女子柔道への認知を高めていったのではないかと考えている。それほど視聴率のとれない柔道競技に、マスメディアの理解やスポンサー協力を得ることはたやすいことではない。大会運営にもかなりの予算が必要なことは容易に想像がつく。その困難な課題が多い中で立派に運営遂行できたのは、これまでの岡山県柔道連盟創設時からの先達先人たちと現執行部の柔道に対する情熱の織りなせる技の結果であり、長い歴史の中で積み重ね築きあげた財産がもたらしたものであると考える。

ここ最近の女子柔道の大活躍にみられるように、日本女子柔道は世界トップの力をつけるまでに成長してきたが、その発展過程に本大会が大きく寄与してきたこと決して忘れてはならない。岡山県柔道連盟をはじめとする本大会を支えてきたすべての関係者に対して、25年もの長きにわたるご苦労、ご尽力に敬意を表し慰労の辞としたい。

JOCエリートアカデミー 楢崎教子氏

初めて、岡山大会に出場したのは高校1年生の時、神奈川県の大先輩で出場しましたが、予選リーグを突破することはできませんでした。この大会が私にとって初めての全国大会であり、全国で勝つことのむずかしさを知った非常に思い出深い大会となりました。

多くの女子選手たちが、この岡山大会を経て全国そして世界のトップを目指して実力をつけていったことは間違いありません。女子柔道の成長は岡山大会とともに歩んできたと言っても過言ではありません。

いま改めて25年間岡山大会を運営し、女子柔道を支えてくださった大会事務局の方たちに深く感謝いたします。

沖縄県柔道連盟 比嘉優子氏

瀬戸大橋が開通した今から20年前、沖縄県は初めてこの大会に出場したのを覚えています。私には選手、そして監督としての多くの思い出があります。他の大会では見られない前夜祭では、多くの選手、監督、関係者との交流ができました。とくに昨年の大会で沖縄県初の3位入賞したときには、都道府県の枠を超え多くの方々から祝福していただきました。

大会を企画運営してくださいました事務局の皆様、本当にありがとうございました。そしてお疲れ様でした。今回で終了するのは残念ですが、今後もこの大会で得た柔道の楽しさ、そして勝負の厳しさ、勝利の喜び、友情、感謝の気持ち等を忘れず指導者として伝えていきたいと思っております。

心より感謝の意を込めて。

柔道ルネッサンス委員会

女性プロジェクト部会 田辺陽子委員

今年で都道府県対抗が最後の大会と聞き、多くの方々からメッセージをいただく企画の事務サポートをさせていただきます。

私自身、この大会にはたくさんの思い出があります。技術的にも未熟であった私ですが、当時はこの岡山でしか経験することができない団体戦で戦う厳しさや、チームのために貢献する大切さなど、試合を通じて一つひとつ大きく成長させてくれました。東京チームの選手として、初優勝した感動は個人戦とは一味違うもので貴重な大会でした。

世界で活躍した女子柔道選手の多くはこの大会から輩出されました。そして、この大会に育てていただいた選手にとって、心に大きく残る大会でもありました。

25年間、選手として、審判としてまたコーチとして、最後の大会となった今年は、東京のコーチとして参加させていただきます。

この大会を支えていただいた多くの方々をはじめ関係各位に心から感謝申し上げます。

本当にありがとうございました。

女性プロジェクト部長 島谷順子氏

この大会では、都道府県から階級ごとに1チーム5名編成で全国規模の試合ができるという大きなチャンスを日本の女子選手たちに与えていただきました。この大会を目標に女子選手たちは切磋琢磨し、年を追うごとに強くなっていくことを実感しました。そして女子柔道の競技人口も飛躍的に増加しました。日本の女子選手の目覚ましい発展の原動力になりました。

全国都道府県の団体とあって、参加する役員選手の数も多くなり受け入れる側の関係者の皆様は25年間もの間大会運営に本当に大変なご努力、ご苦労されてきたことと慮っています。

また前日計量というルールにより、選手たちは前夜にパーティでご馳走をいっぱい楽しませていただいた様子でした。大会運営の中で随所に参加選手たちへのきめ細やかな温かいご配慮をひしひしと感じました。

25年の歴史を持つこの大会が今年度で終了されることはとても残念でさびしいことですが、日本の女子柔道発展に寄与された偉大な功績は永遠に輝き続けることでしょう。大会関係者の皆様、大変お疲れさまでした。

女子柔道関係者として心から感謝いたします。ありがとうございました。



岡山団体を終えて

「おかやま団体」女子柔道選手の間で親しみを持ってこう呼ばれていた都道府県対抗全日本女子柔道大会が第25回を最後に四半世紀の幕を下ろしました。関係者一同充実した達成感とともに、一抹の寂しさを感じているこの頃です。

岡山の強さを全国に発信したい、女子にも団体戦の醍醐味を味わわせたい、日本女子柔道の普及を図りたい。そういう思いを集約して岡山発の団体全国大会は始まりました。

全国の連盟に向けて女子柔道の実態調査、参加意思の確認、全柔連との折衝、開催費用の捻出等、問題は山積していましたがそれらを何とかクリアして昭和60(1985)年8月24日開催にこぎ着けました。不安を抱えながらでしたが、最終的には23道府県32チームの参加を得て、「第1回女子柔道団体優勝大会」としてスタートした記念すべき大会は岡山が制し、大成功を収めました。最後を飾る今大会で岡山が優勝できたのも何か不思議な巡り合わせとしか思えません。

第2回からは全柔連主催となり、そうそうたる女子柔道の面々も参加して、文字通り団体日本一を決める大会になりました。第4回からは全都道府県参加になり、郷土の誇りを賭け、大会は盛り上がりました。

25回の大会を振り返れば、東京と茨城の熾烈な優勝争い、バルセロナ五輪代表選手の勢ぞろい、田村亮子選手の全国大会デビュー等々、どれもが昨日のこのように鮮烈に思い出されます。時代とともに大会の形は少しずつ変わっていきましたが、一貫して女子柔道の発展に寄与したいという思いでやっていきました。最近では「若手の登竜門」とか、「岡山団体に出場して次のステップにする」という嬉しい声も聞いていました。現在の日本を代表する選手のほとんどがこの大会の経験者であることが私たち関係者の誇りです。日本女子柔道界の発展に少しでも寄与できたのではと自負しています。大会諸費用を始め、各種の問題点を抱え、今大会は四半世紀を持って幕を引きましたが、また、何らかの形で復活させたいものです。

一県柔連がこんなにも長く、全国発信を続けられたのも第1回から一心同体でこの大会を支えていただいた山陽放送をはじめ全柔連、岡山県、岡山市等、関係各位の多大の御指導、御支援があればこそです。この紙面を借りて心からお礼を申し上げますとともに、女子柔道の益々の隆盛を祈念いたします。

岡山県柔道連盟 常任理事
小森章二郎

